

トルコ共和国におけるヴィジュアル公共圏の展開

—ゲズィ公園デモを中心に—

園 中 曜 子 *

Development of the Visual Public Sphere in the Republic of Turkey: A Focus on the Gezi Park Protests

SONONAKA Yoko*

This paper deals with the development of the “visual public sphere” in the Republic of Turkey, by focusing on the Gezi Park Protests in 2013, in which people with a variety of ethnicity, religion or sexual orientation have engaged in political and cultural communication through visual images in public. In the visual public sphere, people communicate with each other based on a common sense regarding the needs of safety, recognition, and dignity in social life. This paper argues that the visual public sphere in Turkey developed from around 2008. From that time, people in Turkey began to use a lot of visual images as a means of communication in the public sphere in order to prevent intervention by the government and opposition groups. This paper aims to analyze the way in which visual images have played an important role in the Gezi Park Protests and show how the visual public sphere in Turkey took a new turn of development thereafter.

序

本稿は2013年5月28日から始まった、トルコ共和国イスタンブール、ゲズィ公園を中心に起こされたデモを契機として、トルコにおいて民族や宗教、性的指向など、さまざまな背景をもつ人々がヴィジュアル・イメージとともに現前し、文化政治的なコミュニケーションをおこなうヴィジュアル公共圏（Visual Public Sphere）が展開していく様子を考察するものである。

ゲズィ公園デモに対する先行研究は、調査機関において発表されている、デモの参加者に対するインタビュー調査〔Genar 2013; Konda 2013〕を基におこなわれてきたものが多い。そこでは、なぜデモが起きたか、どのような人が参加したのか、政府とデモ隊の間の衝突には、ど

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2015年6月29日受付, 2015年11月12日受理

のような政治的背景があるのかといった観点から研究がおこなわれてきた [Atay 2013; Taştan 2013; Tuğal 2013]. その際、デモにおいて多数のヴィジュアル・イメージが用いられたことが指摘されることもあったが、ヴィジュアル・イメージの使用はデモ参加者の主張と比較して周縁的な問題であると考えられていたためか、ヴィジュアル・イメージがそのデモにおいてどのような役割を担ったのかという観点からの研究はおこなわれてこなかった。

一方、デモ全般を対象とした先行研究においては、色やヴィジュアル・イメージが参加者の連帯感をもたらすほか、抗議や活動のコンセプトを内外に分かりやすく伝えるものとして、言語に劣らず重要な役割を果たしていることに注目した研究 [Chesters and Welsh 2004; Mattoni and Doerr 2007] がおこなわれてきた。また、メディアによって拡散されるヴィジュアル・イメージが、人々の関心を惹きつけることによって、デモの場のみではなく、そのトピックに対する議論の流れを変えうる役割をもっていることにも注目されてきた。抗議の際にメディアによる拡散を意図して使用されるヴィジュアル・イメージが、公共圏の形成においてどのような機能を果たすかについての研究 [Delicath and Deluca 2003] においては、ヴィジュアル・イメージが、ハーバーマスが念頭においていたような、理性的な議論によって合意を目指そうとする公共圏 [ハーバーマス 1994] にある種の衝撃を与える機能をもつこと、つまり、ヴィジュアル・イメージが、議会や会合で決められる意志決定の過程とは無関係に街頭やメディア上で呈示されることにより、多くの人の関心を惹きつけ、世論の関心事となることで、時には通常の意志決定過程を停止させてしまう力をもつことが指摘されてきた。

このように、デモの際に用いられるヴィジュアル・イメージの機能としては、これまでの研究によって、それが抗議者の間の連帯感を強め、抗議者以外の人々にもその主張をわかりやすく伝える機能をもつこと、マスメディアなどを通じて多くの人々の関心を惹きつけることによって、それが通常の意志決定過程とは異なる方法でその過程に侵入し、時にはそれを停止させてしまう機能をもつことなどが指摘されてきたといえる。

本稿は、先行研究によって指摘されてきたヴィジュアル・イメージの機能を踏まえたうえで、デモの際にヴィジュアル・イメージによって人々が公共的なコミュニケーションをおこなう点に注目するものである。これまでの研究は、主にデモが抗議の場であるという点に焦点があてられていたため、ある集団の抗議がどのようにおこなわれ、どれほどの結果をもたらしたのか、という視角からヴィジュアル・イメージの役割を論じてきたといえる。しかし、本稿ではデモを単なる抗議の場としてではなく、その場においてさまざまな背景をもつ人々がヴィジュアル・イメージを呈示し、あるいはそれを目にすることによって出会い、コミュニケーションをおこなう場としても捉えていくこととする。また、そこでおこなわれるコミュニケーションは、理性的な議論によって合意を目指そうとするコミュニケーションではなく、民族や宗教、性的指向といった背景を異にしながらも同じ場所に生きる人々が、お互いにどのような

日常生活を送っており、どのような問題に直面しているかを理解することによって生活の安全や存在の承認、人間の尊厳について考え、呈示されたヴィジュアル・イメージに対し共感や反発などの感情を示すことによっておこなわれるコミュニケーションであることに注目して論じていくこととする。

そのため本稿では、先行研究のようにデモの参加者やその趣旨をある程度固定的に捉えたうえで、ヴィジュアル・イメージを参加者の結束を強め、また参加者以外の人々にも影響を与えることによって、デモの成果や参加者のさらなる連帯感をもたらすための手段として論じるのではなく、人々がデモの場でヴィジュアル・イメージを通して出会い、コミュニケーションをおこなうことによって、参加者や主張などがその場に応じて変化していく過程をも論じていくこととする。そして、ヴィジュアル・イメージに共感や反発の感情を抱くことを通して人々の間に社会的な問いに対するある種の共通感覚が形成されることで、メディアによる扇動や日常の利害関係によるものとは異なった形で、人々の間に意見の複数性が保たれつつ、公共性が形成されていくプロセスに注目していくこととする。

本稿が注目するヴィジュアル・イメージによるコミュニケーションについて論じるためには、筆者がトルコにおいて2008年前後に成立していたと論じる、ヴィジュアル公共圏の性質を踏まえておく必要がある。

ヴィジュアル公共圏とは、公共空間においてヴィジュアル・イメージが呈示され、また自らヴィジュアル・イメージを呈示することにより、多様な価値観をもつ人々がその場で生じる共通感覚を基に、人々の安全、承認、尊厳についてのコミュニケーションをおこなうことが可能となる場である。

現代の公共空間においてヴィジュアル・イメージは、政権によるプロパガンダや諸派の対立を象徴する機能を果たす媒体、フラッシュ・モブなどの路上パフォーマンスに用いられる媒体、昨今しばしばソーシャル・メディアによって拡散される、多数の人々が共感の感情を示す媒体としてなど、多様な役割を担って使用されている。しかし、本稿は公共空間においてヴィジュアル・イメージを用いたコミュニケーションがおこなわれるすべての場をヴィジュアル公共圏として論じるのではない。本稿が論じるのは、政権による抑圧や人々の間の相互不信により、言語によるコミュニケーションによっては「どうしても伝えにくい」が「どうしても伝えたい事」、つまり、批判などを恐れて言葉にするのが憚られる感情、漠然と抱えている違和感や抗議の感情を伝えるために、人々の間でコミュニケーションの手段として言語ではなくヴィジュアル・イメージが重要視され、ヴィジュアル・イメージを中心としたコミュニケーションがおこなわれる空間である。¹⁾ そのようなヴィジュアル・イメージによるコミュニケーションは、一般大衆によるものに限らず、政権によっておこなわれることもある。しかし、言語によっては他者に「伝えにくい事」が生まれやすいのは一般大衆の側であることがしばしばあ

ることから、一般大衆の側からヴィジュアル公共圏が立ち上がってくる場合が多いと考えられる。

また、ヴィジュアル公共圏の性質として、「伝えにくい事」を伝えるために言語でなくヴィジュアル・イメージが用いられるという側面が重要であるため、本稿ではすでに何らかの言語的なメッセージの象徴として人々に受け入れられたヴィジュアル・イメージが再び用いられるという場面ではなく、新しくヴィジュアル・イメージが生み出され、コミュニケーションがおこなわれるようになる場面に注目して論じていくこととする。

さらに、ヴィジュアル公共圏が存在する場所として、本稿では主に路上や公園で生じたヴィジュアル公共圏を中心に論じているが、ソーシャル・メディアが発達した現代社会にあっては、インターネット上のみに生じるヴィジュアル公共圏というものも考えられるだろう。ただ、インターネット上で言語によって「どうしても伝えにくい事」を発露するのは、ある程度の匿名性が保障されることもあるため、一般的には路上でおこなうよりも容易いことであるといえる。また、その匿名性故に、ヴィジュアル・イメージが扇動的に用いられる傾向も高いといえるだろう。

本稿では、現代社会においてはインターネットがヴィジュアル公共圏のはじめのきっかけとして重要な役割を果たしうること認めつつも、ある人がヴィジュアル・イメージを呈示し、現場でそれを目にした人々が何らかの対応をおこなわざるをえなくなり、結果的に何らかのコミュニケーションを生み出すという点では、やはり身体性を伴う、現実の公共空間におけるヴィジュアル公共圏がその本来の機能を果たしうるものであると考え、路上や公園といった現実の公共空間においておこなわれたヴィジュアル・イメージによるコミュニケーションを中心に論じることとする。

本稿において筆者は、ヴィジュアル公共圏を、トルコにおいては 2008 年前後から形成されてきた公共空間として捉える。ここで、その成立過程を簡単に振り返っておく。1990 年代のトルコにおいては、大量消費社会と政党政治的な政治対立の中で、多くの市民によってヴィジュアル・イメージによる政治的交渉がおこなわれていた。つづく 2000 年代は、公正発展党 (Adalet ve Kalkınma Partisi) のエルドアン政権のもと、世俗主義者とイスラーム復興勢力という二項対立的な構造が崩壊し、民族や宗教、性的指向などの異なる背景をもつ国民の多様性が可視化しはじめた時代であった。多様性の可視化は国の一体性喪失の恐れを引き起こし、2008 年前後には国の一体性を喪失するのではないかという不安に駆られた国民によって民族

1) 本稿が取り上げるゲズィ公園デモ以外の世界各国のデモにおいても、昨今はヴィジュアル・イメージが盛んに用いられている。本稿がその中でも、トルコ共和国のゲズィ公園デモを取り上げる理由のひとつとして、トルコ共和国においては、特に言語によって「伝えにくい事」を伝えるために、2008 年前後から盛んにヴィジュアル・イメージが用いられてきたという背景がある。

的、宗教的、性的マイノリティへの殺人事件が起きるようになっていった。また同じ頃、エルドアン政権もその強権性が指摘されるようになってきていた。

そして2008年前後から、人々はデモなどにおいて意識的に、ヴィジュアル・イメージをコミュニケーションの手段として用いるようになっていった。たとえば、2007年1月に暗殺されたトルコ系アルメニア人の新聞記者、フランク・ディンクの葬儀の際のデモなどをはじめとする、平和や非暴力を求めるデモにおいては、被害者の写真やカーネーションを掲げるなどのパフォーマンスがおこなわれ、政権による報道規制や人工妊娠中絶の禁止などの、政権の抑圧に対するデモにおいては、自らの身体にペイントするなど、自身の主張を視覚的に訴えようとするパフォーマンスが盛んにおこなわれるようになっていった。そこで用いられるヴィジュアル・イメージによる表現は、はじめは反対勢力や政府による介入を防ぎつつ、いかに平和的に自らの主張をおこなうかといった観点からおこなわれるものであった。しかし、ヴィジュアル・イメージはその情動喚起性から、やがてデモに際し街頭の人々の共感を集めるための重要なツールとなっていったのである。また、ヴィジュアル・イメージの感覚的な分かりやすさは、多数の人々をその公共圏に呼び込むこととなった。

つまり、政党政治的な利益分配の観点からは十分に対処されてこなかった問題、たとえば人々の安全、承認、尊厳をめぐる問題は誰もが自分のこととして捉えることのできるものであるため、人々は政党政治の利害関係から自由であることはもちろん、既存の市民団体の立場の違いにもとらわれず、その場に居合わせた人々との協働のもとで成立する共通感覚に基づいてそのヴィジュアル・イメージと向き合うことが可能となったといえる。以上のことから、筆者はトルコにおいて2008年前後に、人々が公共空間においてヴィジュアル・イメージを呈示し、文化政治的なコミュニケーションをおこなう、ヴィジュアル公共圏が成立したと論じる。

本稿は2013年5月に始まったゲズイ公園デモを、このようなヴィジュアル公共圏の視点から分析することで、多くのヴィジュアル・イメージがデモを展開させるうえで重要な役割を果たしていった過程を明らかにするとともに、ゲズイ公園デモをきっかけに、トルコにおけるヴィジュアル公共圏がどのように展開していったのかを論じることを目的とする。

本稿の構成は、まずデモの背景について考察した後、デモを前期と中期、後期とその後に分けて、ヴィジュアル・イメージを用いておこなわれた文化政治的コミュニケーションの実態を考察するものである。

ゲズイ公園デモを分析するにあたっては、人々の抗議が始まり公園の封鎖が解かれるまでをひとつのデモとすることも可能である。しかし、本稿ではその後におこなわれたヴィジュアル・イメージによるコミュニケーションも含めて考察するために、2013年5月28日に座り込みが始まり、2013年6月15日に排除されるまでを前期、座り込みが排除されてからさまざまなデモがおこなわれた9月までを中期、その後を後期とその後として、3期に分けて考察する。

そして、デモの経緯とそこで用いられたヴィジュアル・イメージの形態について振り返った後、デモ以前とそれ以後で、トルコのヴィジュアル公共圏がどのように展開したのかを論じることとする。

1. ゲズィ公園の立地とデモの背景

1.1 ゲズィ公園とその周辺の立地

ここでは、デモが起きたゲズィ公園とその周辺の立地（写真 1）について考察した後、デモの背景を考察していくこととする。まず、ゲズィ公園とその周辺の立地についてである。デモの舞台となったゲズィ公園と隣接するタクシム広場周辺は、イスタンブールの新市街中心部に位置し、交通の要所であるほか、近隣の地区は外国人居住区であったことから、世俗主義の象徴的な建造物が多数存在し、共和国設立後、モスクやオスマン帝国時代の歴史的建造物が多くみられるイスタンブールにおいて、西洋風の文化や共和国の世俗主義体制を強く感じさせる一角となってきた地域である。

ゲズィ公園は、19 世紀にオスマン帝国の兵舎が建てられていた場所である。兵舎が取り壊された後、1921 年にサッカースタジアムが建設されており、サッカースタジアムが 1940 年に取り壊された後は、長い間公園としての機能を果たしてきた。

一方、ゲズィ公園に隣接するタクシム広場は、もともとは水路の分岐点であったが、共和国設立後に市によって重点的に開発された地域であり、この広場は鉄道やバスのターミナルとなり、交通の要所としても重要な意味を担っているほか、メーデーのデモやその他のデモの出発地点としても用いられており、共和国設立以来、さまざまな団体が政治的主張をおこなって

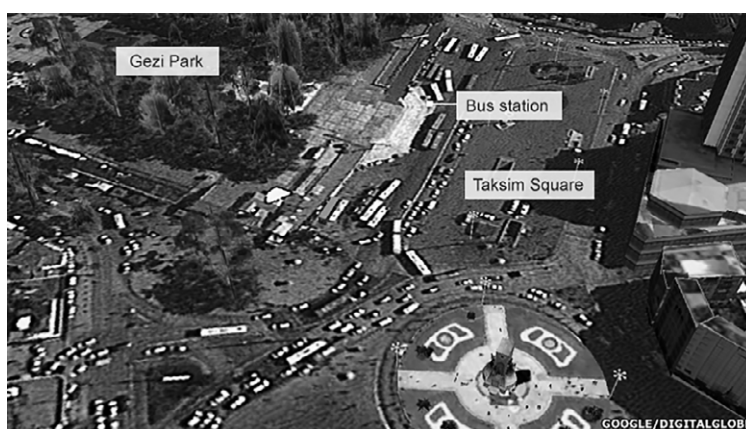


写真 1 ゲズィ公園とその周辺の立地（2013 年 6 月）

右下の円形の部分が共和国モニュメント、右上にアタテュルク文化センターがある。

出所：〈<http://www.bbc.com/news/world-europe-22753752>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

きた場所でもある。

この地域は、市による開発として、まず共和国初期の1928年に独立戦争をおこなった初代大統領アタテュルク（Mustafa Kemal Atatürk, 1881-1938）とその同志の銅像群である共和国モニュメントが建てられ、1969年には、現在は改装中であるが、かつてコンサート会場などとして使用されたアタテュルク文化センターが建てられるなど、さまざまな点で重要な意味を担ってきた地域である。

1.2 ゲズィ公園デモの背景

ゲズィ公園デモの直接的な背景は、ゲズィ公園にオスマン帝国時代の兵舎風の建物を再建し、その内部をショッピングモールにするために、市の職員が公園の木を切ろうとしたことにある。その開発計画に抗議した環境活動家が木を切ることに対し座り込みをおこなったことが、このデモの契機となった。

公園の木を切ることに抗議するという人々の行動の背景には、これまで積み重なったエルドアン首相への不満があった。そのため、木を切ることに対する抗議は、やがてエルドアン首相の政策に対する抗議へと変化していった。

エルドアン首相は2008年頃からその強権化が指摘されてきたが、2011年に3期目に入った頃から、さらにその性質を強めていった。中でもメディア規制や住民の同意を得ずに推し進めた黒海地域の開発計画に対しては、多数の抗議の声が挙がっていた。²⁾ それにもかかわらず、政権は2012年以降、人々の不満を募らせる強権的な政策を次々に発表するようになった。

その強権的な政策は、主に次の2つの方向性をもつものであった。ひとつめは、国民の間の多様性を尊重していないと考えられるような政策である。これらの政策は、ゲズィ公園デモ直前の数ヶ月に次々と発表されていた。たとえば、政権は2013年2月には中絶を実質的に禁止する法案を提出し、³⁾ 女性の人権を不当に侵害しているという批判が高まった。また2013年5月24日には、午後10時から午前6時までのアルコールの販売禁止、モスクから100m以内のアルコール消費禁止法案を強制的に可決させた。⁴⁾ アルコール禁止に関しては、同年4月に「トルコの国民飲料はアイランだ」などという発言をおこなっていたことも、国民の生活に過度に立ち入る首相の姿勢に対する批判が高まるきっかけとなった。さらに2013年5月27日、ボスポラス海峡にかかる第3の橋として建設が予定されている大橋に、オスマン帝国時代にアレヴィー派の人々を虐殺したことで知られるセリム1世の名前をつけることを発表

2) 2012年には動画サイトに Diren Karadeniz（抵抗の黒海）という動画が投稿された。黒海地方の人々の開発への反対運動の様子が複数の有名歌手の歌を背景に流れるもので、多数の国民が視聴した。

3) <<http://www.theguardian.com/world/2013/feb/01/turkish-law-abortion-impossible>>（2015年6月28日閲覧）

4) <<http://www.hurriyetdailynews.com/parliament-adopts-controversial-alcohol-restrictions.aspx?pageID=238&nID=47518&NewsCatID=338>>（2015年6月28日閲覧）

した⁵⁾ことも、アレヴィー派⁶⁾の人々の怒りを引き起こすこととなった。また、2013年5月29日には性的マイノリティの権利拡大を快く思わないという趣旨の発言をおこない、⁷⁾首相の政策に不満をもつ人々に、国民の多様性を尊重しない姿勢のあらわれとして受け止められることとなった。

強権的な政策であると捉えられた政策のふたつめは、イスラームの要素を強めようとしていると捉えられた政策であった。イスラームの要素を強め、世俗主義体制を揺るがそうしていると捉えられた政策は、2012年から顕著におこなわれるようになっていた。2012年11月には、共和国の祝日を記念してパレードをおこなおうとした世俗主義者のイベントが禁止され、2013年2月、3月には、トルコ共和国議会のロゴからトルコ共和国の国旗が外される、銀行や厚生省の名称からトルコ共和国 (Türkiye Cumhuriyeti) の略字である T.C. という文字が削除されるなどの措置がおこなわれ、世俗主義者の批判を招いた。⁸⁾ また、2013年4月には、かねてから国費の無駄使いであると批判されていた、イスタンブルを見下ろすチャムルジャの丘に3万人を収容する巨大なモスクを建設する計画を実行に移したことも、世俗主義者の懸念を高める原因となった。

このように、エルドアン政権の国民の多様性を尊重していないと捉えられた政策、イスラームの要素を強め、世俗主義体制を揺るがそうしていると捉えられた政策は、アレヴィー派の人々や性的マイノリティの人々、世俗主義者や宗教的マイノリティの人々とどまらず、飲酒や出産の自由など、日常生活の選択の自由を制限されると感じた多くの国民に恐れや不安を感じさせるものであった。そしてゲズイ公園の座り込みをおこなった抗議者に対する政府の暴力的な対応は、これまでの不満が怒りとなって爆発する契機となったのである。

2. ゲズイ公園デモ前期 (2013年5月28日～6月15日)

2.1 デモ前期の出来事

デモ前期におこなわれたヴィジュアル・コミュニケーションについて論じるために、まず2013年5月28日に公園で抗議運動が始まり、2013年6月15日に公園での座り込みが排除されるまでの出来事を述べる。

2013年5月28日朝、約50人の環境活動家が、ゲズイ公園の開発工事を中止させるために

5) <http://www.todayszaman.com/news-317231-alevis-protest-plans-to-name-third-bridge-after-ottoman-sultan.html> (2015年6月28日閲覧)

6) 第4代カリフのアリーを信仰する人々であり、ムスリムの2割程度存在するといわれている。アレヴィー派の民族構成は主にトルコ民族とクルド民族からなる。

7) <http://www.hurriyetdailynews.com/main-opposition-urges-protection-of-lgbts-ruling-party-calls-them-immoral.aspx?pageID=238&nID=47860&NewsCatID=339> (2015年6月28日閲覧)

8) この措置に対して Facebook や Twitter では、名前の前に T.C. をつける抗議がおこなわれている。(<http://www.son-dakika.org/gundem/facebook-tc-nedir-neden-isim-basina-tc-ekliyorlar.html>) (2015年6月28日閲覧)

テントを張りキャンプを始めた。これに対し、警官がブルドーザーによる工事をおこなうために抗議者に対し催涙ガスを噴射し、さらに抗議者を殴打し、彼らのテントを燃やしたことがニュースによって伝えられた。この報道によって、非暴力的な抗議に暴力をもって対抗した警官のやり方に抗議する者が続々とゲズィ公園に集まり始めた。その中には、ブルドーザーの前に立って抗議した、クルド人の権利拡大を訴える政党、平和民主党（Barış ve Demokrasi Partisi）の国会議員や共和人民党の議員、多数の有名俳優らが含まれていた。警官は彼らに対しても催涙ガスや唐辛子スプレー、放水によって攻撃をおこない、両者の対立はさらに深まった。

やがて市民は抗議行動をするため、ゲズィ公園と隣接するタクシム広場に集まり始めた（写真2）。彼らは警察による放水や催涙ガスに対しバリケードや投石によって抵抗しつつ、次第にその数を増やしていった。後に発表された統計結果によると、彼らの多くは既存の組織に属していない1990年代生まれの若者であった [Konda 2013]。

彼らはゲズィ公園で座り込みをおこなうほかにも、少し離れた場所からゲズィ公園に向かって行進するデモをおこなった。6月1日、6月2日には、1,000人を超える市民がアジア大陸側からボスボラス大橋を渡ってゲズィ公園まで行進するという大掛かりなデモがおこなわれた。イスタンブールの中心部の道路はデモの舞台となり、道路壁や電信柱にデモのスローガンを示す落書きが書かれたり、ポスターが貼られたりした。そこでは、エルドアン首相を独裁者として



写真2 タクシム広場に集まった抗議者（2013年6月1日）

中央が共和国モニュメントである。

出所：〈<http://www.theatlantic.com/infocus/2013/06/in-turkey-days-of-anti-government-protests-and-harsh-crackdowns/100525/>〉（2015年6月28日閲覧）



写真3 ゲズィ公園内で座り込みをおこなう人々の様子（2013年6月8日）

出所: 〈<http://theindependent.ca/2013/06/08/inside-gezi-park/gezi-park-08/>〉（2015年6月28日閲覧）

揶揄するイラストや、世俗主義の象徴であるアタテュルクのイラストが多くみられた。このほかには、催涙ガスを噴射する警官を揶揄して、「第1回イスタンブール・ガスフェスティバルへようこそ」、アラブの春をもじって、「タイイブ（首相のミドルネーム）の冬が来た」という落書きなど、ユーモアをもって政権を揶揄するメッセージも多くみられた。⁹⁾

また6月2日、エルドアン首相がデモの参加者を「掠奪者達¹⁰⁾」(çapulcu)であると述べたことも、抗議行動を大きくする原因となった。抗議行動はイスタンブールだけではなく国内外の主要都市でおこなわれ、イスタンブールやイズミルではそれぞれ1万人を超える抗議者が集まった。街頭に出て抗議をおこなわない市民は、鍋を叩いて大きな音を出す抗議や、部屋の照明を点滅させる抗議¹¹⁾をおこない、警察の横暴に対して抗議の意志を示した。

一方、公園においては、デモの抗議者に加勢するために多くの市民が加わり、6月2日から約2週間に及ぶ座り込みが始まった（写真3）。当初からこのデモに参加していた環境活動家

9) デモ参加者がユーモアをもって抗議活動をおこなったことについては [Dağtas 2013] に詳しい。

10) エルドアン首相が「掠奪者達」(çapulcu) といったことを揶揄して、英語の現在進行形の語尾をつけて、çapuling という単語が作られた。çapuling という単語は権利のために戦うという意味で用いられ、デモの賛同者によってその意味が共有されるようになっていった。

11) 部屋の電灯を点滅させる抗議は1996年のススルルック事件の際にもおこなわれた抗議の形態である。1996年11月、トルコ北西部のススルルックでおきた自動車事故は、その際にギャングとイスタンブール警察、正道党の国会議員が乗り合わせていたことから、政権とギャングとの癒着を明らかにするものであった。

や若者のほか、これまでイスタンブールにおいて積極的に活動をおこなってきた市民団体がそれぞれの集団ごとに集まり、公園の抗議者を支援した。初期に目立った活動をおこなっていたのは、これまでも政権の政策に抗議するデモを頻繁におこなっていたトルコ青年連合（Türkiye Gençlik Birliği）、若者トルコ（Genç Türk）などの世俗主義体制を掲げる団体や、社会主義者や共産主義者、反資本主義のムスリム、労働組合や女性団体、性的マイノリティの団体などであった。続いて、デモに賛同するクルド人やアレヴィー派、アルメニア人などの民族的・宗教的マイノリティも次々に公園を訪れ、公園はひとつの村のような様相を呈していった。彼らは以前からデモで用いていた旗やキャップ、ゼッケンなどを持参し、公園の中に掲げて座り込みをおこなった。そして共に座り込みをおこなう人々に自分たちの考えが書かれたポスターを掲示したり、書物を配布したりした。たとえば、女性団体は、エルドアン首相が女性には3人の子どもを産むべきだと述べたこと、中絶を非合法化したことに抗議するメッセージを掲げ、¹²⁾ クルド人はクルド語の放送の拡大を求め、アレヴィーの人々は人権拡大と新しい橋の名称変更を求めるなど、公園はそれぞれの団体が各自の主張をおこなう場となっていた。また、そのような集団はたいてい集団ごとに座り込みをおこない、アルメニア人は2007年に殺害された新聞記者、フ란ト・ディンクの死を悼んで座り込みの場所をフ란ト・ディンク通りと名付ける¹³⁾ など、この時期は各集団の主張が色濃く出された時期であった。

やがて公園内にはキッチンやカフェ、TVコーナーや喫煙コーナー、モスクや図書館などが作られ、人々はそこでテントを立てて共同生活を始めた（写真4、写真5）。また、彼らは共に歌を歌ったり、ダンスやヨガをおこなったりするなど、座り込みをしながら共通の行動をおこなうことでその連帯感を強めていった。公園内に収まりきれない人々はやがて公園外でもダンスや歌などのパフォーマンスをおこなうようになった。また、この公園の座り込みの平和的な雰囲気により、家族で座り込みに加わる者も増加し始めた。

さらに、公園の周囲では、「革命の博物館」（写真6）と称し各人の主張を記入する場所や、ふせんに望みを書いて貼る、「望みの木」（写真7）などのスペースが設けられた。座り込みの場にはこれまで政治活動をおこなっていなかった人々も多数訪れており、従来からデモをおこなっていた人々とともに彼らも「望みの木」や「革命の博物館」に自らの望みを書いた。そこには、彼らが欲するものとして自由や民主主義といった言葉が多数書き込まれた。また、このほかにもそれぞれの主張を演説し、拍手をし合うなどのパフォーマンスがおこなわれ、この座り込みの場は、民族、宗教、性的指向など、さまざまな背景をもつ人々が一同に会してお互いの主張を知り合う場となっていたのである。

12) 〈<http://feministnetworkproject.wordpress.com/2013/06/09/feminist-resistance-in-taksim-gezi-park-2/>〉（2015年6月28日閲覧）

13) 〈<http://www.aksam.com.tr/guncel/gezi-parkinda-hrant-dink-caddesi/haber-213086>〉（2015年6月28日閲覧）



写真 4 食べ物は基本的に無料で配布された（ゲズィ公園）

出所: 〈<http://hassasanne.blogspot.jp/2013/06/taksim-gezi-park-izlenimlerim.html>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 5 革命の図書館と題し、本を持ち寄るコーナーが作られた（ゲズィ公園）

出所: 〈<http://www.hurriyet.com.tr/kultur-sanat/haber/23435469.asp>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

ゲズィ公園デモ以前も、イスタンブールでは 2008 年前後からさまざまな団体が連日のようにデモをおこない、それぞれの団体の大まかな主張は知られることとなっていた。しかし、この座り込みの場は、異なった意見をもつ個人がそれぞれの主張を知り、時には語り合うことで、お互いの存在への理解を深める重要な場となった。

また、6 月 4 日から抗議者の一部が寄付を募り始め、6 月 7 日にはニューヨークタイムズにこのデモの抗議に関する広告を出した（写真 8）。この広告は、警官の横暴をやめること、報道の自由、民主的な対話、政府の権力の乱用に関する公正な捜査がデモの要求事項として述べられたもので、この抗議が平和的な抗議であることを訴えるものであった。この内容はデモ参加者のすべての意見であるとはいえないが、この座り込みの動機を明確に示しているものとい



写真6 「革命の博物館」と題された建物

ゲズィ公園内の建物内部では、それぞれの主張を書くコーナーが設けられた。
出所：〈<http://www.adalin.biz/taksimde-devrim-muzesi-acildi/>〉（2015年6月28日閲覧）



写真7 ふせんに望みを書いて貼る「望みの木」（タクシム広場）

出所：〈<http://www.thetower.org/article/the-gezi-diaries-erdogans-turkey-goes-medieval/>〉（2015年6月28日閲覧）

えるだろう。

このように、公園での座り込みは比較的平和的な雰囲気でおこなわれていた。しかし、公園の外部や国内の主要都市では警官と抗議者との衝突が連日のように続き、多数の負傷者、死者を出すようになっていったのである。また、政権支持者と思われる民間人によっても抗議者への暴力がおこなわれ、抗議者と彼らに良い感情を抱いていない市民の間でも対立が深まって



写真 8 ニューヨークタイムズに掲載された広告（2013 年 6 月 7 日）

出所：〈<http://www.haberself.com/h/1166/>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

いった。

このような混乱の中で、6 月 13 日には著名なムスリム知識人の人々が、イスラーム的価値を重視する人々の市民団体の事務所¹⁴⁾において、「ああムスリムたち」という宣言をおこなった。そこでは、トルコ共和国の政治史においてしばしば人々の分断を招いてきた世俗主義者とイスラーム復興勢力の政治対立にとらわれるのではなく、強権化したエルドアン政権を支持することが果たしてトルコ社会の民主化の発展にふさわしいことなのか、真にイスラーム的価値を重視するとはどのようなことなのかをトルコの人々に再考してもらおうとするメッセージが読み上げられ、抗議者の倫理的な連帯を強める基礎を提供した。

しかし、エルドアン首相は、このような大規模な抗議の中でも強気の姿勢をゆるめていなかった。6 月 14 日には抗議者の代表と会談をおこない、公園の開発計画をいったん停止するという裁判所の決定を受け入れることを発表した。6 月 15 日、前日から 14 時間に及ぶピア

14) 2010 年に設立された市民団体、労働と正義のプラットフォーム（Emek ve Adalet Platformu）が会場となった。



写真9 ゲズィ公園デモを象徴するヴィジュアル・イメージの数々

中段左端の「止まる男」以外は、ほぼデモ前期に生まれたヴィジュアル・イメージである。

出所：〈http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/60/Symbols_of_Gezi_Protests.jpg〉(2015年6月28日閲覧)

ノ・コンサートがおこなわれていたタクシム広場とゲズィ公園一帯に警官がなだれ込み、座り込みの抗議者の一斉排除をおこなったのである。

2.2 デモ前期に用いられたヴィジュアル・イメージ

デモ前期には、このデモを象徴する多くのヴィジュアル・イメージが生まれ、街頭の落書きやソーシャル・メディアによってそのヴィジュアル・イメージが共有されていった(写真9)。直接デモに参加しない人々によっても、これらのイメージを変形させて政権を風刺するヴィジュアル・イメージが多数作られ、インターネット上で拡散された。

ここではこのデモの中で生まれ、特に頻繁に用いられた2つのヴィジュアル・イメージについて論じていくこととする。ひとつめは、赤いドレスの女性のヴィジュアル・イメージであ

る。赤いドレスの女性のヴィジュアル・イメージは、デモ初期に報道記者によって撮影された写真（写真 10）が基になっている。警官が近距離から赤いドレスを着用した女性に催涙ガスを噴射する姿がニュースで流れると、この写真が非暴力の抗議をおこなう抗議者に対する政府の暴力性の象徴として捉えられるようになっていった。このイメージはソーシャル・メディアによって急速に広まり、デモの賛同者によって頻繁に引用されるようになっていった（写真 11）。このイメージはトルコ国内にとどまらず、国外でもトルコ政府の暴力的な措置に対する批判を高める契機となり、パリやニューヨーク、ロンドンなどでおこなわれたデモの中でも盛んに用いられた。



写真 10 「赤いドレスの女性」のもとになった写真

出所: 〈<http://www.theguardian.com/world/2013/jun/05/turkey-lady-red-dress-ceyda-sungur>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 11 歴史雑誌『歴史』が赤いドレスの女性のイメージをオマージュして制作した表紙

この雑誌は政府により廃刊になり、この号は刊行されることがなかった。

出所: 〈<http://loolfm.blogspot.jp/2013/07/yasaklanan-ntv-tarih-dergisi-54.html>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

また、ヴィジュアル・イメージを掲げるだけではなく、実際に赤いドレスを着ることでこのデモの参加者に賛同の意を示す行動もおこなわれた。6月3日にはイタリアの女性議員の集団、6月20日には首都アンカラの外国大使の集団がこのようなパフォーマンスをおこない、8月末のトルコ国内の大学卒業式においても、赤いドレスを着るパフォーマンスがおこなわれた。

このように、赤いドレスの女性のイメージは、警官と非暴力的な市民の対立という、このデモの象徴的な構図を示すものとして人々の間に根付いていった。2014年6月にトルコ各地でおこなわれた、ゲズィ公園デモの1周年記念デモでもこの構図が再現されるなど、多くの人々の間でゲズィ公園デモの象徴として、このヴィジュアル・イメージが共有されていったのである。

ふたつめは、ペンギンのヴィジュアル・イメージである。ペンギンのヴィジュアル・イメージは、大規模なデモがおこなわれていた6月初旬、CNN トルコがデモの映像を流さず、ペンギンの生態についてのドキュメンタリーを放送していたことに由来するものである。ペンギンは政府によるメディア規制、政府寄りのメディアによる偏向報道など、メディアが公正を保っていないことの象徴として捉えられるようになっていった。

デモの際、道路の壁には多数のペンギンの落書きが描かれ、催涙ガスを防ぐためにマスクをしたペンギンが「抵抗」する様子とともに、「南極も抵抗しています」などといったメッセージが書き加えられた。また国内外において、ペンギンのマスクや着ぐるみを着て抗議の意志を示す行動が盛んにおこなわれ、ペンギンのヴィジュアル・イメージは座り込み排除後も、トルコ国内においてメディアに公正さを求める抗議の際のシンボルとして共有されるようになっていった（写真12、写真13、写真14）。

このように、デモ前期に頻繁に用いられたヴィジュアル・イメージは、いずれも政府の暴力

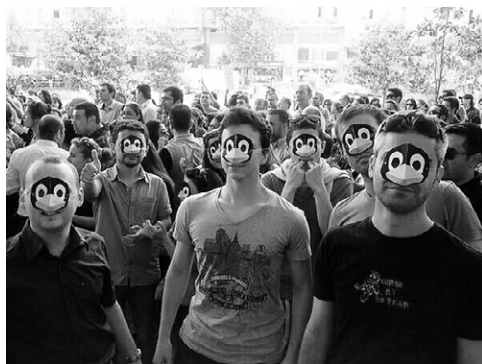


写真12 ペンギンのお面をつけてメディアの偏向報道に抗議する人々（2013年6月1日）

出所：〈<http://www.mediamatic.net/358797/nl/penguins-in-the-park>〉（2015年6月28日閲覧）



写真 13 新聞のテレビ番組欄は、政府系メディアの番組欄にペンギンのイラストを載せて風刺した
Aydın 紙、2013 年 6 月 9 日、筆者所蔵。



写真 14 ペンギンの着ぐるみを着て、メディアの検閲に対して抗議する人々 (2013 年 7 月、イスタンブール)
出所: 〈<http://www.todayszaman.com/news-321975-upside-of-gezi-park-process-a-boom-in-humor-satire.html>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)

的な側面を、ユーモアをもって揶揄するものであった。そのイメージからは、民族や宗教、性的指向など、さまざまな背景をもつデモ参加者が共通のヴィジュアル・イメージを用いて政府を批判することで、ひとつのデモを作り上げていったことを読み取ることができる。

3. ゲズイ公園デモ中期 (2013 年 6 月 16 日～9 月末)

3.1 デモ中期の出来事

公園で座り込みをおこなっていたデモ隊は警察によって 6 月 15 日には排除され、6 月 16 日には公園とタクシム広場の閉鎖がおこなわれた。しかし、警官と抗議者の衝突は収束をみせることはなかった。6 月 16 日、アンカラにおいては警官がデモ死亡者の葬儀のパレードに放水をおこない、催涙ガスを噴射したことが伝えられたほか、イスタンブールにおいても警官が抗



写真 15 政権が配布したトルコ国旗と公正発展党の旗
公正発展党の旗にはシンボルマークである、輝く電球がプリントされている（筆者所蔵）。

議者を拘束したことが報じられた。

一方エルドアン首相は、イスタンブールで公正発展党の大規模な集会「国民の意志に敬意を表する集会」(Milli İradeye Saygı Mitingleri)を開き、各地からバスを出して多数の支持者を集めた。彼はそこで、自身が多数の支持を得て政権の座についており、世論は公正発展党に味方していることを示そうとした。そしてニュースで報道される警官の暴力は「でっちあげ」であると主張した。またゲズィ公園のデモは、2013年5月に起きたシリアとの国境の都市、レイハンルにおける爆破事件と同様、外国人による陰謀であると匂わせた。¹⁵⁾

首相はまた「旗のキャンペーン」と称して、トルコの国旗と公正発展党の旗を配布し、家のベランダなどに掲げることを推奨した(写真15)。このキャンペーンからは、デモによってほろびが生じた国民のまとまりを取り戻そうとするとともに、ここでひとまずデモを収束させようと考えていた政府の考えを読み取ることができる。

このように、政府がデモを収束させようと考えていたのと同時期の17日、タクシム広場で立ち続けるひとりの男性があらわれた。彼はリュックサックのみを持って広場に到着すると、アタテュルクの旗が掲げられたアタテュルク文化センターに向かって無言で立ち続けた。数時間後、その行動に気づいた人々がソーシャル・メディアにその写真を掲載し、やがて各地で彼を模倣して沈黙の抗議をおこなう人々があらわれ始めた。「止まる男」(Duran Adam)と呼ばれたこの抗議は、各地で夜を徹して続けられた。また日数が経つにつれて、デモ前期の象徴的なヴィジュアル・イメージとなったペンギンの着ぐるみを着て立つ、交通機関の運賃値上げを契機として同時期に抗議行動を起こしたブラジルの国旗を持って立つなど、各自でアレン

15) 〈<http://www.hurriyetdailynews.com/police-lock-down-taksim-as-pm-erdogan-shows-off-in-istanbul.aspx?pageID=238&nlID=48921&NewsCatID=338>〉(2015年6月28日閲覧)

ジしておこなわれることも多くなっていった。このように、ゲズイ公園デモ中期においては、前期と比較して、よりヴィジュアル・イメージの与えるインパクトを重視した抗議が増加していったのである。

なお、「止まる男」と同様の平和的な形の抗議としては、6月22日頃に各地でおこなわれた、デモで亡くなった人々を悼むイベントがある。そこでは、警官に死者への哀悼の意を示す赤いカーネーションを渡したり投げたりしつつ、「国民を裏切らないで」などという訴えをおこなう抗議がおこなわれた。しかしこのパフォーマンスに対しても、警官は放水と催涙ガスによって対応したため、各地でさらに抗議のデモがおこなわれることとなった。

そして6月30日には、イスタンブールにおいて2つの大規模なデモがおこなわれた。ひとつめは、性的少数者の団体が毎年おこなっているデモ、イスタンブール・プライドであり、このデモにはゲズイ公園デモの抗議者も合流し、約十万人の人々が参加した。ふたつめは、サッカーチーム、フェネルバフチェのファンによる、試合への出場停止を命じる欧州サッカー連盟の決定とフェネルバフチェとベシクタシュサッカーチームに対する政府の態度に抗議するデモである。この2つのデモは、以前のようにその集団に所属する者だけではなく、その主張に賛同する多くの人々が参加したことに特徴がある。彼らはお互いの主張に賛同し、共にデモをおこなった。その中で、彼らは「どこでも抵抗、どこでもタクシム」といったスローガンを掲げ、前期にデモの象徴となった赤いドレスの女性のポスターやペンギンの人形を持って行進をおこなったり、デモの死者を哀悼するプラカードを掲げたりした。

続く7月、8月は比較的平穏な時期であった。7月は断食月でもあった。反資本主義のムスリムを中心とする市民団体は、タクシム広場から続くイスティクル通りの1キロ弱の区間にシートを敷き、そこへ皆が食事を持ち寄っておこなうイフタルを企画した。イフタルの食事は高級レストランでもとることができ、また例年タクシム広場では、市がテントを張り無料で食事を配ることが慣例となっている。イフタルはイスタンブールの人々にとって、見知らぬ人と共に同じ行事をおこなう、もしくは食事を共にすることで、ムスリムとして、あるいは市民としての連帯感を得る重要な機会であるという側面ももつ行事である。今回、市民団体は、高級レストランでとる食事を「資本主義」の食事、市のテントで配られる食事を「搾取」の食事、皆でとる食事を「自由」の食事として、彼らが主催した食事を「地球の食卓」と名付けた。警察は介入せず、通りを歩いていただけの人々が続々と参加し、平和な雰囲気の中で皆が食事を分かち合う場となった（写真16、写真17）。¹⁶⁾

しかし、政府に対する人々の抗議の感情は収まったわけではなかった。9月初旬には、ゲズイ公園デモの再来といわれるような、大規模なデモが起きることとなった。そのきっかけ

16) 〈<http://www.al-monitor.com/pulse/originals/2013/07/turkey-gezi-park-protesters-observe-ramadan-iftars.html>〉（2015年6月28日閲覧）

園中：トルコ共和国におけるヴィジュアル公共圏の展開



写真 16 写真 17 断食時のイフタルの様子

出所：〈http://acikradyo.com.tr/default.aspx?_mv=a&aid=31809〉(2015 年 6 月 28 日閲覧)



写真 18 新聞の一面には「止まる男」が大きく取り上げられた
左から Cumhuriyet 紙, Aydın 紙, 2013 年 6 月 19 日, 筆者所蔵.

は、アンカラの中東工科大学の敷地内に新しい道路を建設する計画が持ち上がり、学生の抗議運動が起きたことである。中東工科大学の緑地帯は 1960 年代後半に学生によって植樹された木々から構成されており、この緑地帯を破壊し道路にすることに対して反発の感情が生じてきたのである。そして、この抗議行動に対する警官の暴力に対して、イスタンブールなどの主要都

市では木の苗を手を持って行進するなどの、大規模な抗議行動がおこなわれた。

3.2 デモ中期に用いられたヴィジュアル・イメージ

デモ中期において用いられたヴィジュアル・イメージの特徴は、「止まる男」や「赤いカーネーション」などのように、自身の政治的な立場を明確に示していないことにある。ここでは中期に用いられたヴィジュアル・イメージとして、「止まる男」と「7色の階段」を取り上げ、その特徴について論じる。

まず、「止まる男」についてである。「止まる男」は、前述のように1人の男性による沈黙の抗議をきっかけに、国内外で急速に広まった抗議の方法である(写真18)。この抗議において、抗議者はトルコ国旗やペンギンなど、いくつかのヴィジュアル・イメージを用いることはあっても、基本的には何も持たず、何も語らずに抗議をおこなった。また、その場所に実際に立つことはなくても、靴を置き、地面に人型を描くことによって抗議をおこなう人々も登場した(写真19)。

この抗議は主にトルコの主要都市の広場やショッピングセンターでおこなわれたが、国外においても共感を呼び、やがてニューヨークやパリなどでもおこなわれるようになった。また、ゲズィ公園デモの死者が出た現場や政府系の放送局の前、歴史的に有名な虐殺事件が起きた現場でもこの抗議がおこなわれた。

その中には、1993年にアレヴィー派の住民が多数虐殺されたスィヴァスのホテルの前や、



写真19 各地で「止まる男」の抗議がおこなわれ、靴を置くだけで抗議の意思を示す人々も多くみられた(イスタンブル)

出所: <<http://www.sondakika.com/haber/haber-taksim-de-duran-adam-cylemi-4744347/>> (2015年6月28日閲覧)

アルメニアとトルコの和解に努めたアルメニア系トルコ人の新聞記者、フランク・ディンクが暗殺された現場なども含まれていた。このような抗議の場所の選択から、「止まる男」の抗議は政府の暴力に対するものだけではなく、国民に向けられるあらゆる形の暴力に向けられるものであったことを読み取ることができる。

なお、この「止まる男」の抗議が始まってから数日後、「止まる男」に抗議するために、彼らと向かい合うように「止まる男に対して止まる男」というTシャツを着た集団が登場した（写真20）。彼らも「止まる男」と同様沈黙のまま立ち続け、声高にその主張をおこなうことはなかった。そして「止まる男に対して止まる男」に対しても、「止まる男に対して止まる男に対して止まる男」というプラカードを掲げた集団が沈黙の抗議をおこなった（写真21）。この間、警官は日陰で座って本を読みながら待機することとなった。

この「止まる男」の抗議はただ立っているだけの抗議であることから、暴力で対抗することは難しく、警官も強制的な排除をおこなうことができない平和的な抗議であった。この抗議



写真20 「止まる男に対して止まる男」と書かれたTシャツを着て、「止まる男」の抗議をする人々と向かい合って立つ人々

2013年6月19日、タクスィム広場、筆者撮影。



写真21 「止まる男に対して止まる男」の前で、「止まる男に対して止まる男に対して止まる男！」という紙を手に立つ人々

2013年6月19日、タクスィム広場、筆者撮影。



写真 22 アタテュルク文化センターに向かって立ち続ける人々
2013 年 6 月 20 日，タクシム広場，筆者撮影。

は、座り込みの抗議をおこなう場所を失い、また警官の暴力に対して「抵抗」をおこなうことに疲弊した抗議者にとって、彼らに向けられるあらゆる暴力への抵抗の形として広く受け入れられるようになっていった（写真 22）。そして他の事柄に対する抗議においても、無言で立つというこの抗議の形態が頻繁に用いられるものとなっていったのである。

また、この抗議は「止まる男」に対して「止まる男に対して止まる男」、「止まる男に対して止まる男」に対して「止まる男に対して止まる男に対して止まる男」というように、考えを異にする市民の間でヴィジュアル・イメージによるコミュニケーションがおこなわれたという点でも、ヴィジュアル公共圏のコミュニケーションの場としての性質を強めるうえで、重要な意味をもつものであった。

続いて、「7色の階段」についてである。2013 年 8 月 27 日、64 歳の元エンジニアの男性が、イスタンブールの階段を色とりどりのペンキで塗り始めた。数段ペイントしたところで住民から好評を得たため、彼は 4 時間かけて 145 段の階段を 7 色に塗っていった。この 7 色は性的少数者のデモ、イスタンブール・プライドでも使用されるレインボー・カラーであるため、この行動を性的少数者の権利拡大を訴えるものと捉えることも可能である。しかし彼は、階段を塗り替えた理由を何らかの政治的主張からではなく、ただ「周りの環境を美しくするため」であると述べていた。この階段は市民の間で評判となり、初日から何百人もの人が訪れ、結婚写真をとるカップルも登場した。

しかし、彼が階段を 7 色に塗り終えた 8 月 29 日の夜、何者かがこの階段を灰色に塗り替え



写真 23 再び7色に塗られたイスタンブールの階段

出所：〈<http://www.hurriyetdailynews.com/Default.aspx?pageID=447&GalleryID=1638&gpID=3>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

てしまった。市は当初否定したものの、市の職員が塗り替えたことがやがて明らかになった。この市の対応に対し、抗議の意志を示そうとする人々は 8 月 31 日、ソーシャル・メディアで呼びかけをおこなって人を集め、階段を再び7色に塗り替えるという運動を始めた。ツイッターでは「ブラシを持ってきて」というメッセージのほかにも「抵抗の階段」というハッシュタグがつけられ、そのメッセージが拡散された。¹⁷⁾ その結果、イスタンブール以外の都市や北キプロスなどでも、階段を7色もしくは好きな色に塗り替える運動がおこなわれた（写真 23、写真 24、写真 25）。

この「7色の階段」をめぐる人々の運動は、声高にはその主張がおこなわれなかったものの、デモ前期にゲズィ公園内に作られた「革命の博物館」の入口に、「ここにはすべての色がある」というメッセージが書かれていたのと同じ考えを共有していると推測できる。つまりこの運動は、多様な背景をもつ人々が同じ権利をもち生きることが求める感情のあらわれと考えてよいだろう。

このように、デモ中期に頻繁に用いられたヴィジュアル・イメージは、いずれも平和的な方法で暴力や不平等への抗議を訴えるものであった。デモ中期において、ヴィジュアル・イメージを呈示する人々の主張は政府にのみ向けられるものというよりも、市民社会において人権が尊重されること、多様な背景をもつ人々が同じ権利をもち生きることといった、人々の安全、

17) 〈<https://twitter.com/hashtag/DirenMerdiven?src=hash>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 24 各地で階段を 7 色に塗る活動がおこなわれた

出所: 〈http://www.huffingtonpost.com/2013/09/10/turkey-rainbow-stairs_n_3895082.html〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)



写真 25 7 色に塗られた各地の階段や道路

出所: 〈<http://www.anorak.co.uk/366128/news/huseyin-centinel-and-the-wonderful-painted-stairs-of-beyoglu-istanbul-photos.html/>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)

承認，尊厳をめぐる問題へと変化していったことが分かる。

4. ゲズィ公園デモ後期とその後

4.1 その後のデモで使用されたヴィジュアル・イメージ

ここではゲズィ公園デモ後期とその後において，ヴィジュアル・イメージによるコミュニケーションが盛んにおこなわれたデモやパフォーマンスの事例を取り上げる。そして，ゲズィ公園デモを契機とするヴィジュアル・イメージの役割の変化と，トルコのヴィジュアル公共圏の性質の変化について述べる。

まず，2014年3月におこなわれた，ベルキン・エルバン少年の葬儀を契機としておこなわれたデモの際のヴィジュアル・イメージである。アレヴィー派の住民が多数を占める地区に住む14歳のベルキン少年は，ゲズィ公園デモの衝突が頻繁に起きていた2013年6月16日，デモの中を歩いて家族のパンを買いに行く途中に警官に催涙ガスの瓶で殴打された。そして約9ヵ月の昏睡状態を経た後，2014年3月に死亡した。その際，母親が泣き崩れる姿がTVや新聞などで大きく報道され，政府の対応に対し不満をもつ人々の怒りや悲しみの感情を刺激した。また，エルドアン首相が彼をテロリストの一味であると述べたという発言が報道された¹⁸⁾ことも，人々の怒りを高める原因となった。政府の暴力に抗議するデモは各地でおこなわれたが，特に葬儀がおこなわれたイスタンブルには多くの人々が集まった。

そのデモで用いられたヴィジュアル・イメージの形態は，ベルキン少年の写真をお面のように形作ったものと，彼が買いに行くはずだったパンであった。特にパンはこの事件の象徴的なヴィジュアル・イメージとして盛んに用いられた（写真26，写真27）。デモや座り込みに用いられたパンは，子どもがパンですら安全に買いに行けないといった，国民の生活の基本が脅かされていることを示す象徴的なヴィジュアル・イメージであり，パンを手を持ち，掲げることで，同じ国民としてこの問題を看過してはいけないことを街頭の人々に訴える，重要な役割を果たしていたといえる。

パンを用いておこなわれたデモやパフォーマンスの形態は，主にパンと「ベルキンは死なない」，「痛みは終わることがない」などのプラカードを持ち，政府の暴力に対する抗議をおこなうものであった。また，パンと「私はベルキン」と書かれたプラカードを目の前に置いてひとりで座り込みをおこなう市民も多くみられた。このような，抗議者が死者の名前を名乗るプラカードは，イスタンブルにおいては2007年に暗殺されたアルメニア系トルコ人の新聞記者，フランク・ディンクの追悼行事の際にも頻繁に用いられてきたものである。このプラカードは，抗議者が自身と死者を重ね，死者の痛みを共有していることを示す役割をもっていた。

18) 〈<http://news.ebru.tv/en/us/erdogan-links-dead-turkish-teenager-to-terrorist-groups>〉（2015年6月28日閲覧）



写真 26 「私はベルキン」など書いたプラカードを持って座り込みをおこなう人々
パンと赤いカーネーションが置かれている。

出所: 〈<http://haberozne.com/turkiye-berkin-elvan-icin-ayaga-kalkti.html>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)



写真 27 パンとベルキン少年の母親が泣いている様子が書かれた新聞を持ってデモをおこなう弁護士会
の人々 (アンカラ)

出所: 〈<http://fotogaleri.hurriyet.com.tr/galeridetay/80338/2/3/ankarada-avukatlar-ellerinde-ekmek-ve-berkin-fotografiyla-yurudu>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)

また、ベルキン少年のデモでは、彼のお面を顔につけ、その痛みを共有していることを示すパフォーマンスも頻繁におこなわれた（写真 28）。デモに用いられるお面は、イスタンブルにおいては 2008 年前後から、死者が出たことに対する抗議のデモに頻繁に用いられてきたヴィジュアル・イメージである。ベルキン少年の事件に対する抗議においては、これらの抗議のほかにも、彼が持ち帰ることができなかったパンを子どもたちに配るパフォーマンス（写真 29）、壁や車、店舗の扉に哀悼の意を示す黒いリボンをつけたパンをはさむパフォーマンス（写真 30、写真 31）、道にベルキン少年のイラストを描くパフォーマンス（写真 32）な



写真 28 ベルキン少年のイラストをお面にして抗議の意思を示す人々（イスタンブル）

出所：〈http://www.radikal.com.tr/turkiye/turkiye_berkin_elvan_icin_sokakta-1180775〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 29 ベルキン少年の死を哀悼して子どもにパンを配り、生活の安全を訴えた（ボドルム）

出所：〈<http://www.gercekgundem.com/spor/39721/berkin-elvan-anisina-ekmek-dagitti>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 30 ファッションショーではデザイナーが黒いリボンがつけられたパンを飾り、また手に持ち、抗議の意思を示した（イスタンブル）

出所: 〈<http://www.kadinmagazin.net/berkin-icin.html>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 31 ドアにはパンが掲げられた（イスタンブル）

出所: 〈<http://haberozne.com/turkiye-berkin-elvan-icin-ayaga-kalkti.html>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

ど、思い思いの形で、理不尽な死をもたらした警官や政府への怒りを表現する抗議がおこなわれた。

そして夜には市民が集まり、多くのキャンドルの明かりの中で彼の写真とパンの周囲に座り、皆で冥福を祈るイベントが各地でおこなわれた。このような哀悼のイベントは、怒りの表



写真 32 学生の抗議デモでは、道にベルキン少年のイラストを描くパフォーマンスがおこなわれた（アンカラ）

出所：〈<http://www.hurriyetdailynews.com/police-intentionally-targeted-berkin-elvan-father-says.aspx?pageID=238&nID=64183&NewsCatID=341>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

現よりも悲しみや痛みを分かち合う要素が強いものであった。ベルキン少年の事件への抗議は彼がアレヴィー派の住民であり、さらに他のデモの死亡者の多くがアレヴィー派であったことも、デモを特徴づける要素のひとつとなるものであった。アレヴィー派は宗教的少数派であり、これまでも差別や偏見の中でその人権拡大を目指してきたものの、前述のようにエルドアン首相の政策のもとで、アレヴィー派を虐殺したことで知られるオスマン帝国の皇帝の名前を橋につけることが計画されるなど、その人権問題が解決していないという声が多数挙がる状況にあった。そのため、この抗議は生活の安全に関わる問題のほかにも、マイノリティの人権問題を国民に考えさせるきっかけとなった。

最後に、2014 年 5 月 13 日にイスタンブール近郊の都市、ソマで起きた炭鉱事故における、企業の過失や政府の対応に抗議するデモである。2014 年 5 月 13 日、ソマで炭鉱事故が起こり、多数の死者や行方不明者が出ていることと、その劣悪な労働環境がトルコ全土に報道された。遺体にすぎる家族や行方不明者を待ち続ける家族の映像がテレビで公開されると、国民の間に悲しみが広がった。そのような中、首相がこのような事故はどこでも起こりうる事故だという発言をおこない、政府の対応に不満をもつ人々の怒りを引き起こすこととなった。また、炭鉱を経営していたソマ・ホールディングスが政府と結びつきが強い企業であることも、政府に対する怒りを高める原因となった。さらに翌日、首相の側近が抗議する若者を執拗に蹴りつける動画がネット上に公開され、各地で抗議行動がおこなわれ始めた。¹⁹⁾



写真 33 写真 34 地面や路面電車の中に横たわり、ソマで死者が出ていることに対し抗議する人々の様子
(2014 年 5 月 13 日, イスタンブル)

出所: 〈<http://www.hurriyet.com.tr/gundem/26417055.asp>〉(2015 年 6 月 28 日閲覧)

特に 2014 年 5 月 14 日には、イスタンブルにおいて大規模なストライキやデモ行進、抗議のパフォーマンスがおこなわれた(写真 33, 写真 34)。このデモで最も多く用いられたヴィジュアル・イメージの形態は、テレビで報道されたソマの労働者の服装に似せた服装をすることであった。抗議者は主に黄色のヘルメットをかぶり、身体を黒い炭で汚し、ソマの事件に対し、「事故ではなく殺人だ」(Kaza değil, Cinayet)というプラカードを掲げてデモをおこなった。

また、「彼らはこのように死んでいったのだ」ということを訴えるために、身体を炭で汚す

19) 〈<http://www.hurriyetdailynews.com/pm-erdogans-adviser-sparks-outrage-for-kicking-mourner-amid-soma-protests.aspx?pageID=238&nID=66495&NewsCatID=341>〉(2015 年 6 月 28 日閲覧)



写真 35 写真 36 ソマの労働者の服装をして抗議の意思を示す人々（2014 年 5 月 14 日，イスタンブール）
出所：〈<http://insanhaber.com/guncel/her-yer-soma-36909>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

などして路上に座り、公道を歩くパフォーマンスも多数おこなわれた（写真 35，写真 36）。このほかには、ゲズィ公園デモの「止まる男」と同様、路上に立ち続け、沈黙の抗議をおこなう者もあらわれた。

ソマの事故に対する抗議は、ベルキン少年の時と同様、同じ国民が理不尽な死を遂げたことに抗議するものであった。また彼らが低賃金で働いていたことから、賃金格差、安全な環境で労働をおこなえないことが問題とされた。そして、事故後の多数の報道や哀悼のための絵画展などを通して、その死を悼む多くの人々の間に、そのような環境を運命（kader）と捉え、家族を守りつつ仕事を続けた労働者に対する敬意が芽生えていったのである。

また夕刻になると、ベルキン少年の葬儀の時と同様市民が集まり、多くのキャンドルの明かりの中で 300 人を超える犠牲者の冥福を祈るイベントが各地でおこなわれた。彼らは黄色のヘルメットと哀悼の意を示す赤いカーネーションを取り囲んで座り、悲しみの感情を分かち合った。また商店街の窓にソマ事件の犠牲者を哀悼するポスターを貼る、人目につくところに黄色のヘルメットを置くなどの行動によっても、市民は抗議の意思を示した（写真 37，写真 38，写真 39）。

以上のように、ソマの事故への抗議では、黄色のヘルメットは労働者ひとりひとりの命の象徴であった。ヘルメットは彼らが危険な状況で働き、その結果命が奪われたことの理不尽さを



写真 37 ソマの事故への抗議として、警官の前にヘルメットを置く人々（2014 年 5 月 14 日，イスタンブル）
出所：〈<http://www.vosizneias.com/164516/2014/05/14/soma-turkey-in-photos-turkish-mining-disaster/>〉
（2015 年 6 月 28 日閲覧）



写真 38 ソマの炭鉱事故の犠牲者を哀悼する人々（2014 年 5 月，イスタンブル）
出所：〈<http://www.hurriyetdailynews.com/police-crack-down-on-soma-protests-in-istanbul-and-ankara.aspx?pageID=238&nID=66609&NewsCatID=341>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

街頭の市民に訴える重要な役割を果たしていたのである。

4.2 ゲズィ公園デモ後期とその後のヴィジュアル公共圏の性質

ここでは、2008 年前後のヴィジュアル公共圏成立時から、ゲズィ公園デモ後期にかけてのヴィジュアル・イメージの役割の変化と、ヴィジュアル公共圏の性質の変化について考察する。

まず、ゲズィ公園デモ後期とその後のデモにおけるヴィジュアル・イメージの役割について



写真 39 ソマの事故に抗議する労働組合のデモ

棺にヘルメットと写真が置かれ、「ソマを忘れるな」と書いたプラカードが添えられている。

出所：〈<http://www.hurriyetdailynews.com/court-freezes-all-assets-belonging-to-soma-holding.aspx?pageID=238&nID=67598&NewsCatID=341>〉（2015 年 6 月 28 日閲覧）

であるが、その特徴的な点としては、主に次の 2 点が挙げられる。1 点目は、問題を焦点化するような象徴的なヴィジュアル・イメージがひとつ決まり、それを基にデモが展開していくようになったこと、2 点目は、個人でも複数でも、場所を選ばずヴィジュアル・イメージを用いた抗議が始められるようになったことである。

まず 1 点目の、問題を焦点化するような象徴的なヴィジュアル・イメージが決定されることについてである。この決定のプロセスは、「靴箱」、「パン」、「ヘルメット」などのように、ひとつの問題が起きた後、その問題に即座に抗議をおこなった人物が用いたヴィジュアル・イメージが市民の間で共感と呼び、その日のうちにトルコ各地で用いられるようになっていくものである。2008 年前後に成立したヴィジュアル公共圏においては、ヴィジュアル・イメージはデモの補助的な役割を果たしており、あくまで人々の主張を分かりやすく街頭の人々に伝えるためのものであった。しかし、ゲズイ公園デモ以降においては、問題を焦点化するようなヴィジュアル・イメージが即座に決まることにより、それを示して抗議の意思を示すことがデモの中心的な行動となっていったのである。このような抗議は、ヴィジュアル・イメージがひとつの集団にとっての問題の象徴というだけではなく、抗議者に共感する多くの人々にとって、トルコ社会が抱える問題の象徴であるという共通認識があることによって可能となる。このような共通認識があるが故に、抗議者はヴィジュアル・イメージを提示するだけで自身の主張を街頭の人々に訴えることができるようになったのである。

2 点目は、個人の手による、場所を選ばないヴィジュアル・イメージの使用である。ゲズイ公園デモにおいては、「止まる男」や「7 色の階段」の抗議など、これまでのデモやパフォーマンスとは異なる、個人による抗議が多数おこなわれ始めた。そして、ゲズイ公園デモ後期とその後のデモやパフォーマンスにおいては、そこで用いられるヴィジュアル・イメージは、「パン」や「ヘルメット」のように、だれもが気軽に用いることができるものへと変化して

いった。このようなヴィジュアル・イメージの登場により、街頭で座り込みをおこなうことに抵抗がある市民も、ただそのヴィジュアル・イメージを人目につくところに設置するだけで抗議の意思を表明することが可能となった。

このように、ゲズィ公園デモ後期とその後においては、ヴィジュアル・イメージがマスメディアやインターネットなどを通じて抗議の象徴として即座に伝えられることにより、それがより多くの人々を、ヴィジュアル・イメージを用いたコミュニケーションの場へと引きこむ役割を果たしたのである。また、成立直後のヴィジュアル公共圏と比較して、より気軽に用いることのできるヴィジュアル・イメージが選ばれたことから、その抗議に、市民団体に所属しておらず、これまで日常的に抗議の意思を表明してこなかった人々も次々と引きこみ、新たなコミュニケーションを生んでいくようになっていったといえる。またこの時期、政権によってもヴィジュアル・イメージがコミュニケーションの手段として盛んに使用されるようになっていった。政権によるヴィジュアル・イメージの使用は境界が設定される危険があり、慎重に論じるべきものであるが、トルコにおいてヴィジュアル・イメージがコミュニケーションの手段として大きな役割を担い始めたことを示すものとなっていることは確かである。

続いて、ヴィジュアル公共圏の性質の変化についてである。ゲズィ公園デモ以前においては、公共空間において主張を同じくする、組織化された人々の集団がヴィジュアル・イメージを呈示する形のデモやパフォーマンスが多くみられた。その内容は情動喚起的なものであり、また日常的な問いを呈示する形であったため、多くの人々の公共圏への参加を可能としうるのであった。しかし、人々はヴィジュアル・イメージを目にすることで同じ感情を共有することはあっても、デモの内容は世俗主義者の団体、イスラーム的価値を重視する団体、民族的、宗教的、性的マイノリティの団体といった特定の集団の主張であり、その集団と無関係の個人がその主張に共感し、その場で参加するといったことは困難であった。この傾向はゲズィ公園デモ前期にもみられ、抗議者は政府への抗議という点では一体感を感じながらも、街頭においてデモをおこなう際やポスターを掲げる際には、上述のような、それぞれの所属する集団の立場から主張をおこなうことが多くみられた。一方、公園における座り込みにおいては、自由や民主主義といった共通のキーワードを用いて、集団の枠を超えた主張がおこなわれるようになってきていた時期でもあった。

ゲズィ公園デモ中期においては、6月30日のイスタンブル・プライドのデモ、フェネルバフチェのデモなどのように、自分が所属する集団とは異なる集団の抗議に加わり、共に協力しあって主張をおこなう人々が増えていった。

そして、デモ後期とその後には、抗議の形をとりながらも、街頭で人々が感情を分かち合う要素が強いデモやパフォーマンスがおこなわれ始めた。また、そこで呈示される問いは、宗教的、民族的、性的マイノリティや女性に対する暴力への抗議や、政府の飲酒規制やインター

ネットの検閲に対する抗議など、個別のトピックへの抗議を訴えていた成立直後のヴィジュアル公共圏とは異なり、「同じ人間として、暴力を受けながら生活している人々が存在する社会はおかしいのではないか」「同じ人間として、搾取する側と搾取される側に分かれている社会はおかしいのではないか」といった人々の安全、承認、尊厳に対するものへと変化していった。

ただし、デモ後期とその後にヴィジュアル公共圏の情感的な要素が強まった理由として、人々の強い怒りや悲しみから抗議がおこなわれ、ヴィジュアル・イメージもそのような感情に基づいて制作・使用されたという背景があることも忘れてはならない。実際、デモ後期とその後においては、デモ隊と警官隊の衝突が頻繁に起き、ベルキン少年の事件においては追悼デモグループと他グループ間の抗争の中で射殺事件が発生することもあった。デモ後期とその後のヴィジュアル公共圏は、中期の「止まる男」や「7色の階段」のように、意識的に衝突を避け、平和的に主張をおこなおうとするものではなく、人々の間で生じた感情を分かち合うことに重きが置かれていたため、ヴィジュアル・イメージによって怒りや悲しみの感情を発露し、そのことにより感情を沈静化させることに成功した人々もある程度存在したかもしれないが、その感情がさらに高ぶり、暴力という手段に出る人々が存在したことも看過することはできないだろう。

結 語

本稿では、2013年5月28日から始まったイスタンブル・ゲズイ公園におけるデモを契機として、トルコにおいてヴィジュアル公共圏が展開を遂げていく過程を考察してきた。

ゲズイ公園デモ以前のイスタンブルにおいては、2008年前後に、人々がヴィジュアル・イメージを用いて日常的な問いを呈示し、文化政治的なコミュニケーションをおこなうヴィジュアル公共圏が成立していた。そして多様な背景をもつ人々が暮らすトルコにおいて、ヴィジュアル・イメージは異なった背景をもつ人々の間でも日常的な問いが共有される、重要なツールとなりつつあった。

ゲズイ公園デモの前期において、ヴィジュアル・イメージは、政府を揶揄することで抗議者の間に連帯感を形成するツールとなっていった。そこでは、赤いドレスの女性やペンギンなど、デモに参加した人々が共感できるようなヴィジュアル・イメージが続々と生まれ、そのイメージがソーシャル・メディアによって拡散されることにより、参加者の連帯感を生み出していったのである。

また、ゲズイ公園デモの中期は「止まる男」をきっかけに、個人の手によるヴィジュアル・パフォーマンスが多数おこなわれるようになった時期である。「止まる男」に感化されたパフォーマンスは、広場やショッピングセンターなどの至る所でおこなわれた。このような新た

な形態の抗議の登場により、デモ中期以降、トルコにおいてはこれまで以上に、個人の主張を示すことが容易になっていった。またデモやパフォーマンスの内容も、「7色の階段」のように、集团的利益の主張ではなく、非暴力や平和的共存といった、より多くの人々に開かれたものへと変化していった。さらに、このようなヴィジュアル公共圏の広がりには、反政府側の抗議にとどまらなかった。本稿では論じなかったが、ゲズイ公園デモを経て、トルコ国旗を用いた政党のCMの制作など、政権も盛んにヴィジュアル・イメージを用いるようになっていったのである。

このように、トルコのヴィジュアル公共圏は、参加する人々の種類、規模、その影響力において、コミュニケーションがおこなわれるごとに広がりを見せていった。ゲズイ公園デモを契機として引き起こされたこのようなヴィジュアル公共圏の展開は、その後のデモにも大きな影響を与えることとなる。デモ後期とその後においては、市民はパンやヘルメットのような身近なヴィジュアル・イメージを用いて、街頭で抗議の意思を主張することが可能であることを知ることとなった。

このように、ゲズイ公園デモ以後のトルコのヴィジュアル公共圏の性質的特徴的な点は、民族や宗教、性的指向などのさまざまな背景をもつ人々が街頭において出会い、その場でヴィジュアル・イメージを介したコミュニケーションをおこなうことが可能になったことである。ヴィジュアル公共圏において感情を分かち合うことによって、人々はそれぞれがもつ背景に基づかず、その場で見知らぬ人との感覚の協働の場を構築し、そのような場を重ねることで、ある種の共通感覚を立ち上げていく。それは、ヴィジュアル・イメージがもつ性質によるだろう。たとえば、殺人事件などの被害者の写真をお面のように形作ったヴィジュアル・イメージは、被害者の顔そのものを指し示すものではない。そのお面を身につけた人々は、被害者の立場に立ち、被害者が感じた、理不尽な形で生命が奪われたことに対する悲しみや怒りを、自身のここのように受け止めていることを街頭の人々に示しているのである。また、ソマの炭鉱事故の際に自身の顔を炭のようなもので汚し、炭鉱労働者と同じヘルメットを身につけて街頭で座り込みをおこなった人々が用いたヴィジュアル・イメージは、ソマの炭鉱労働者やその家族の痛みを、自身のここのように受け止めていることを表現しようとするものである。

このように、情感的な要素が強調され始めたヴィジュアル公共圏は、生命の儚さ、傷つきやすさといった人間のもつ弱さに焦点化することで、その抗議に共感する人々の間につながりを生み出すものとなっていった。人々はヴィジュアル・イメージを媒介として、人間のもつ弱さを再確認し、生活の場を共にする者として強い連帯感を覚えることが可能になったといえるだろう。

以上のように、本稿ではトルコにおけるデモをヴィジュアル公共圏という視角から論じること、デモを単に人々の抗議の表現であるという視点から論じるのとは異なり、公共空間にお

けるデモを契機として人々がその社会における共通感覚を形成し、公共性を生み出していくという過程を論じることが可能になった。具体的には、ゲズィ公園デモにおいて、多様な背景をもつ人々が共に政府に対し抗議をおこなったという事実のみに注目するのではなく、多様な背景をもつ人々が共に社会の問題を焦点化するようなヴィジュアル・イメージを目にし、使用することで、生活の安全や承認、尊厳といった日常生活に関わるトピックへと人々の意識が向かい、共通感覚を生み出していく過程を明らかにすることができた。

それでは、上記のようなヴィジュアル公共圏は、今後の社会においてどのような機能を果たしうるだろうか。ここで、トルコ社会をめぐる議論と公共性をめぐる議論の文脈に照らして、考察をおこなうこととする。

現代トルコ社会は、これまでは強い国家の支配のもと、公共圏の成熟が十分になされていないと考えられてきたが、ここ数年はゲズィ公園デモなどの大規模デモにおいて、民族や宗教、性的指向など、さまざまな背景をもつ人々がそれぞれの意見を表出させるようになってきたことを受けて、トルコにおいても公共圏成熟の萌芽がみられるという指摘 [Göle 2013]、支配的公共圏に対抗する公共圏の萌芽がみられるという指摘 [Coskun, G and Coskun, B 2014] もおこなわれるようになってきている。

筆者もヴィジュアル公共圏を公共圏成熟の萌芽のひとつとして捉えるが、まず抗議の場であるという側面に注目すると、先行研究においてヴィジュアル・イメージが形成する公共圏の特性として論じられてきたように、人々が個別のトピックについて綿密な議論を重ね、合意に至るという性質をもつ公共圏とは異なり、ヴィジュアル・イメージによって多くの人々の関心を惹きつけることによって、議会や委員会といった通常の意志決定手続きに衝撃を与え、時には停止に導くような機能をもつものであると考える。そのことは、ゲズィ公園の開発が人々の抗議により、結果的に中止となったことにもあらわれているだろう。また、本稿で考察してきた事例に照らしても、具体的な話題について綿密な議論を重ね、解決策を打ち出すというタイプの公共圏とは異なった性質をもっていることが明らかである。

しかし、ヴィジュアル公共圏の主な機能は、上記のようにデモの成果に関わるものだけにとどまらない。ヴィジュアル公共圏は、単に抗議の場であるというだけではなく、さまざまな背景をもつ人々の出会いの場、社会的な問いに対する共通感覚の形成の場でもある。そのような視点からみて、ヴィジュアル公共圏はどのような機能をもちうるのだろうか。ここではその機能として、主に次の2点を挙げることとする。

1 点目は、日常生活の中で人々が会おう問題を議論の場へと引き出す役割である。現代社会において、多くの人々は日常の利害関係に専念せざるを得ない生活を送ることを強いられている。そこでは、自身の社会的立場を害することがないように、本音ではなく「建て前」でコミュニケーションをおこなうことが要求される。ヴィジュアル公共圏は、そのような社会の中

で人々の共通の関心事となっていたのにもかかわらず言語によっては表現しにくい問題を焦点化し、公共空間において呈示することでその問題を明るみに出し、コミュニケーションの場へと引き出す機能をもっているといえるだろう。

2点目は、人々が互いの存在への配慮を意識するようになるという機能である。ヴィジュアル公共圏は、誰もが生の脆さや弱さを内包した人間であることに重きが置かれる空間である。そこでは、出自や属性によって人々を分けることも、効率至上主義に基づいて有用でないと判断したものを排除することも拒否される。どのような人も同じ「弱さ」をもつ人間であり、それぞれの出自や属性によってその生が軽んじられることはあってはならないことが主張される。そのことは、民族や宗教、性的指向といった背景は異なるが同じ感情を共有する人々の間に、自分はひとりではないという安心感や連帯感をもたらすこともあるだろう。

ここで、ヴィジュアル公共圏が孕む問題点を指摘しておくこととする。デモ後期とその後に暴力的な衝突がしばしばみられたように、ヴィジュアル・イメージによる主張そのものは平和的なものであっても、ヴィジュアル・イメージのもつ情動喚起性から、ヴィジュアル公共圏におけるコミュニケーションは、人々の怒りや悲しみを必ずしもすべて沈静化することはできない。そればかりか、強い怒りや悲しみを抱えた人々にとっては、時にはヴィジュアル・イメージを目にしたことでその感情をさらに強め、暴力を誘発する危険性も孕んでいるといえるだろう。つまり、あまりにも情動的な要素が強くなりすぎると、人々は冷静な判断力を失い、多様な背景をもつ人々が平和的なコミュニケーションをおこなうことを可能にし、互いの存在への配慮に目を向けるという、ヴィジュアル公共圏の重要な機能を大きく損なってしまうこととなる。

ヴィジュアル公共圏は、ある種の問題点を孕みつつも、それが良い方向に機能している限りは、現代の人々がしばしば忘れがちな互いの存在への配慮という視点をもちつつ、なおかつ自身の自発的な感情に基づいたコミュニケーションをおこなうことが可能な場である。それは、必ずしも即座に問題解決をもたらすものでないかもしれないが、政治的主張やアイデンティティに基づく権利の主張とは異なる観点から社会の話題を論じる場として、今後重要な役割を果たしうる公共圏であると思われる。

引用文献

- Atay, T. 2013. The Clash of 'Nations' in Turkey: Reflections on the Gezi Park Incident, *Insight Turkey* 15(3): 39-44.
- Chesters, G. and Welsh, I. 2004. Rebel Colours: 'Framing' in Global Social Movements, *The Sociological Review* 52(3): 314-335.
- Delicath, J. W. and Deluca, K. M. 2003. Image Events, the Public Sphere, and Argumentative Practice: The Case of Radical Environmental Groups, *Argumentation* 17(3): 315-333.

- Mattoni, A. and Doerr, N. 2007. Images within the Precarity Movement in Italy, *Feminist Review* 87(1): 130-135.
- Göle, N. 2013. Gezi-Anatomy of a Public Square Movement, *Insight Turkey* 15(3): 7-14.
- Taştan, C. 2013. The Gezi Park Protests in Turkey: A Qualitative Field Research, *Insight Turkey* 15(3): 27-38.
- Tuğal, C. 2013. “Resistance Everywhere”: The Gezi Revolt in Global Perspective, *New Perspectives on Turkey* 49: 157-172.

オンライン文献

- Dağtas, S. 2013. The Politics of Humor and Humor as Politics During Turkey’s Gezi Park Protests. 〈<http://www.culanth.org/fieldsights/397-the-politics-of-humor-and-humor-as-politics-during-turkey-s-gezi-park-protests>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)
- Genar. 2013. Gezi Parkı Profile. 〈<http://www.haber7.com/foto-galeri/24975-iste-gezi-parkin-in-profil-i>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)
- Konda. 2013. Gezi Parkı Arastirmasi. 〈http://konda.com.tr/en/raporlar/KONDA_Gezi_Report.pdf〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)
- Coskun, G. and Coskun, B. 2014. From Stadia to the Gezi Park: On ÇARŞI, Public Sphere and Political Agency of a Football Fan Group. 〈<http://www.free-project.eu/documents-free/Working%20Papers/GulcinBalamirCoskun-BezenBalamirCoskun-FromStadiaToTheGeziParkOnCARSIPublicSphereAndPoliticalAgencyOfAFootballFanGroupALL.pdf>〉 (2015 年 6 月 28 日閲覧)

日本語文献

- ハーバーマス, ユルゲン. 1994. 『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究』細谷貞雄・山田正行訳, 未来社.